

## 清原家の〈学問の系譜〉を担う藤原仲忠

——『うつほ物語』「蔵開・上」巻を始発として——

武藤那賀子

「キーワード」①『うつほ物語』②学問③系譜④清原家」

『うつほ物語』首巻「俊蔭」巻では、清原俊蔭の父が式部大輔で左大弁であったこと、また俊蔭自身も漢学の才があったために遣唐船に乗ることになったということが語られる。しかし、俊蔭が異郷から帰ってきてからは、清原家の学問に関する記述はない。それが、「蔵開・上」巻で、俊蔭の孫にあたる藤原仲忠が俊蔭ゆかりの地、三条京極邸を思い起こし、そこにあった蔵を開いてからは、清原家が学問の家であることがことさら強調されるようになる。

たとえば、三田村雅子は、「琴の技能のみで俊蔭に連なっていた仲忠は、漢才の方面でも清原家累代の学業を継ぐ存在となる。」と指摘し、大井田晴彦もこれに同調している。また伊井春樹も、「人々を拒み続けていた蔵は、仲忠の手によって、あつけなく開いた。……この出来事は仲忠に清原一族の後継者としての自覚と誇りを覚醒させたのである。」と述べる。猪川優子は、「蔵の発見は、仲忠に自らの出自に対する問い直しを呼び起こ

した。」とした上で、「自らが蔵すなわち学問を受け継ぐ者であるという自覚を持って蔵の中へと入って行く。」と述べた上で、学問の家の後継者については、いぬ宮が入内した後に産んだ皇子が受け継ぐのではないかと結ぶ。

また、〈蔵開き〉をした後、朱雀帝や春宮、五の宮の前で進講を仲忠が行なった場面について、三田村雅子は、「俊蔭の集の発見とその進講によって、琴の一族としての俊蔭一族の神話性は復活し、琴の持つ意味が再生産される。あて宮でさえ獲得できなかった琴の妙技の価値の下落を、辛うじて喰いとめ、上昇させさせたのは、書かれた物としての日記や家集の力であった。」と述べ、大井田晴彦は、「わずか仲忠・帝・春宮・五の宮の四人のみによる、密室的なこの講書は、俊蔭一族と朝廷との過去のかかわりを問いなおさずにはおかない。」と指摘する。また伊藤禎子は、書物が仲忠の声によって行なわれていることに着眼した上で、「蔵開き」の行為は、学問の物語の再始発で

あつたわけではなく、音楽と学問の相互の越境を語り、互いに「書かれた物」でありつつも「音声」でもあるという、新たな展開へと進んでいたのである」と述べている。<sup>註5)</sup>

忘れ去られていた学問が、俊蔭伝来の蔵について語り出されることによつて物語に再登場してくる意味とは何だろうか。清原家が学問の家であることを再提示する必要性とは何だろうか。「うつほ物語」には、清原俊蔭を始祖とした〈琴の系譜〉があることは、先行研究で何度も論じられたところである。だが、系譜と呼べるべきものは、〈琴〉だけではないのではないだろうか。本論では、仲忠が受け継いだ「学問」の系譜について述べてみたい。

## 一、〈蔵開き〉

〈蔵開き〉は、仲忠が、後にいぬ宮への秘曲伝授の場となる京極邸を思い出す場面、「昔より、祖の伝はり住み給ひける所にこそありけれ。わが親の御時になくなりたるを、我造らせ、母北の方に奉らむ」(蔵開・上 四六七)<sup>註6)</sup>から始まる。仲忠は、京極邸について、「昔より、祖の伝はり住み給ひける所」と言っており、京極邸が「清原氏」の土地であると認識していることがわかる。そして、訪れた京極邸は、「昔の寝殿一つ、巡りはあらはにて、塗籠の限り見ゆ」(蔵開・上 四六七)という状態であつた。他は荒廢してしまつているにも拘わらず、塗籠だけは残つているという不可思議な状態である。その塗籠とは別に、仲忠は敷地の西北の隅に蔵があるのを見つける。西

北の隅、つまり乾の方角というのは、陰陽道では福神を祀る意味合いがある。その蔵には、「世になく厳しき鎖かけたり。その鎖の上をば、金を繕りかけて封じたり。その封の結び目に、故治部卿のぬしの御名文字繕りつけたり」(蔵開・上 四六七)とあり、ここでも、この蔵が清原家のものであることが確認できる。また、「故治部卿のぬしの御名文字繕りつけたり」とあることから、この蔵を最後に閉めたのが俊蔭であることが明瞭となつている。それを見た仲忠は、「これは、書どもならむ。昔、累代の博士の家なりけるを、一枚書見えず。その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、ここにも残りたるものを。これ開かせむ」(蔵開・上 四六七)と、初めて清原氏が博士の家であることの証明を目の当たりにしている。

仲忠が蔵を見ていると、河原の方から、九十歳ほどの姫と翁が来て、昔語りを始める。この二人の語りは、この京極邸が清原氏のものであることを一層印象付けている。また、この二人の語りの、「世に聞こえぬ音楽の声なむ絶えざりし。その音楽を聞く人は、皆、肝心榮えて、病ある者なくなり、老いたる者も若くなりしかば、京の内の人ほ巡りて承りし」(蔵開・上 四六八)により、俊蔭と俊蔭の娘の琴の靈異が顕される。姫と翁の語りの、「その父母隠れ給ひにしかば、かの御娘は聞こえ給はずなりにき」(蔵開・上 四六八)までは仲忠も知る内容であるが、俊蔭の娘と自身が北山に籠つた後のことは、ここで初めて知る。「まかり寄る者は、やがて倒れて、多くの人死に侍りぬ」「夜は、人にも見え侍らで、馬に乗りて来つ、

弓弦打ちをしつつ、夜巡りするやうになむ侍る」(蔵開・上 四六八)とは、俊蔭の霊が守ってくれていることの証であり、また、「この嫗・翁の見奉り侍るに、わが国に見え給はぬ姿がおはする玉の男の見え給へる」(蔵開・上 四六八)は、嫗と翁にとつて、仲忠の容姿が、俊蔭の再来であることを示す。

蔵の周りを清め、自身も装束を改めた仲忠は、蔵を開けることにする。「承れば、この蔵、先祖の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠を放ちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この蔵、先祖の御霊、開かせ給へ」(蔵開・上 四六九)と、自身が清原一族の者であり、蔵を開けるに値する人物は自分しかいないのだということを俊蔭の霊に言い聞かせるかのような祈りの後、鎖に手をやると、蔵は開き、それによつて仲忠は「これは、げに、先祖の御霊の、我を待ち給ふなりけり」(蔵開・上 四七〇)と確信する。蔵の中に入っていたものは「書ども、麗しき帙篋どもに包みて、唐組の紐して結びつつ、ふさに積みつつあり。その中に、沈の長櫃の唐櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よきほどの柱ばかりにて、赤く丸き物積み置きたり。」(蔵開・上 四七〇)といったものであった。仲忠は、「口もとに目録を書きたる書」(蔵開・上 四七〇)だけを取り出し、元のように鎖をさして帰っていく。

三条殿にて、仲忠は、母(俊蔭の娘)に蔵開きをしたことを伝え、目録を見せる。そこには、「いとみじくありがたき宝物多かり。書どもはさらにも言はず、唐土にだに人の見知らざりける、皆書きわたしたり。葉師書・陰陽師書・人相する書・

孕み子生む人のこと言ひたる、いとかしこくて、多かり」(蔵開・上 四七〇)とある。母は、何故父俊蔭が自分にこれらの宝物を残してくれなかつたのかと不満を言うが、仲忠は、「いとかしこくものし給ひける人なりければ、思すやうこそありけり。これらをそこに持ち給ひては、いかにかはせさせ給はまし。今まではありなましやは」(蔵開・上 四七〇)とその理由を推測している。

この〈蔵開き〉の記事からは、京極邸、そしてその西北の隅にあつた蔵が、清原一族のものであり、蔵を作つたのが清原俊蔭であること、また、仲忠は「藤原仲忠」と名乗つてはいるものの、少なくともこの場面においては「清原氏」の子孫であると認識されていることが言えるだろう。さらに、嫗と翁の語りにより、首巻「俊蔭」巻が再びここで思い起こされていることも重要である。

では、仲忠が〈蔵開き〉によつて得た書物は、この後、どのような変遷を辿るのかを、以下に見てゆく。

## 二、女一の宮の懐妊・いぬ宮の産養

前節で見た〈蔵開き〉の場面は「霜月」のことだが、この直後、翌年の「睦月」に、仲忠の妻朱雀帝の女一の宮が妊娠する。以下に、一連の記事を見てゆく。

①かくて、返る年の睦月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの蔵なる産経などいふ書ども取り出でて、並べて、「女

御子にてもこそあれ」と思ほして、「生まるる子、かたちよく、心よくなる」と言へる物をば参り、さらぬ物も、それに従ひてし給ふ。参り物は、刀・俎をさへ御前にて、手づからと言ふばかりにて、我、なほ、添ひ賄ひて、参り給ふ。

かくて、その年は、立ち去りもし給はず。かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ。

かかるほどに、子生み給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞こえ給ふ……上、「さるべきことにこそあなれ。さる人をば、かねてより勞りなどこそすれ。いかならむ」。女御、「何かは。かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを。誰も誰も、よに、疎かには」。

(蔵開・上 四七一〜四七二)

②かかるほどに、寅の時ばかりに生まれ給ひて、声高に泣き給ふ。中納言も驚きて、御帳の帷子を掻き上げて、「何ぞや、何ぞや」と聞こえ給へば、尚侍のおとど、「あなさがなや。あらはなり」とて、女御の君に居隠れ給へば、「仲忠は、今宵は、目も見侍らず」と言ふものから、女御の君に、宮懸かり奉りて騒ぎ給ふを見れば、白き綾の御衣を奉りて、耳挟みをして、惑ひおはす。いと宿徳に、ものものしきものから、氣高く、子めきて、御髪揺り懸けたり。わが親も、いづれとなくめでたし。同じ白き着給へり。中納言、「なほ、物、はた、籠れりける所かな」と見給ふに、後の物も、いと平かなり。

(蔵開・上 四七三〜四七四)

③尚侍のおとど、「生まれ給へる君の御臍の緒切り給はむ」とて、「ただ、人は候へ。人のするわざをこそはせめ。賜へや。この物、見苦しの蝸牛や」とのたまへば、つい居て、「何を召すぞ」。おとど、「下なる物一つ」とのたまへば、指貫を脱ぎて奉り給へば「否や、今一種を」とのたまへば、白き袴の袴一襲を脱ぎて奉りて、「あな、命長や」とて、御衣架のもとに立ち寄りて、入りて見給へば、御達笑ふ。

(蔵開・上 四七四)

④中納言、御帳のもとに寄りて、つい居て、「まづ、賜へや」と聞こえ給ふ。尚侍のおとど、「あなさがなや。いかでか、外には」とのたまへば、帷子を引き被きて、土居のもとにて抱き取りたれば、いと大きに、首も居ぬべきほどにて、玉光り輝くやうにて、いみじくうつくしげなり。「いと大きなものかな。かかればこそ、久しく悩み給ひつるにやあらむ」と思ひて、懐にさし入れつ。右のおとど、「いで、いで」とて寄りおはすれば、「ただ今は、さらに、さらに」とて見せ奉らず。おとど、「今からも、はた」とて笑ひ給ふ。

中納言、「かの龍角は、賜はりて、いぬの守りにし侍らむ」。尚侍のおとど、うち笑ひて、「いつしかとも、はた。さても、かやうの折には言ふやうかある」とのたまへば、「おほかたのことは、いかが侍らむ。この琴の族ある所、声する所には、天人の翔りて聞き給ふなれば、『添へたらむ』とて聞こゆる

なり」。尚侍のおとど、典侍して、大将のおとどに、「かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。取らせむ」と聞こへ給へれば、急ぎて、三条殿に渡り給ひて、取らせておはしたり。三の宮、取り給ひて、中納言にさし遣り給ひつれば、唐の縫物の袋に入れたり。稚児を懐に入れながら、琴を取り出で給ひて、「年ごろ、この手を、いかにし侍らむ」と思ひ給へ嘆きつるを、後は知らねど」などで、はうしやうといふ手を、はなやかに弾く。声、いとほこりに、にぎはしきものから、また、あはれにすこし。よろづ物の音多く、琴の調べ合せたる声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。

(中略)

中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風、いと声荒く吹く……尚侍のおとど、御床より下り給ひて、琴を取り給ひて、曲一つ弾き給ふ。その音、さらに言ふ限りなし。中納言の御手は、面白く、凝しきまで、雲風の気色、色異なるを、この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齢栄ゆる心地す。かかれば、宮は、御琴を聞こし召しつれば、ただにおはしつるよりも若やかに、「わざをしつる」とも思されず、苦しきこともなくて起き居給へり。中納言の君、「悪しかめり。なほ臥させ給ひて聞こし召せ」と申し給へば、宮、「ただ今は、苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも、皆やみぬ」と居給へり。女御の君・尚侍のおとど、「風邪ひき給ひてむ」とて、騒ぎ、臥せ奉り給ひつ。琴は、弾き果

て給へれば、袋に入れて、宮の御枕上に、御佩刀添へて、置きつ。

かかるほどに、明け果てぬれば、御格子ども、皆上げわたし、御几帳立てつつあるに、あるじのおとど、宮の御はらからの宮たち、崩れて、皆下り給へば、皆人も、下りぬ。おとど、宮たち、殿の君たち、並み立ちて、押し給ふ。中納言の君は、かくし給へども、「あなかしこ」とも聞こえて、なほ、稚児抱きて居給へり。  
(蔵開・上 四七五〜四七七)

⑤かかるほどに、御乳参るべき時なりぬ。御薬、父の中納言の懐にて含め奉り、御乳付け、左衛門佐殿の北の方、御几帳のもとに候ひ給へば、女御の君、掻き抱きて、御衣着せ奉り給ふ。  
(蔵開・上 四七八)

⑥御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、皆す。……典侍のおとど、「こころ、昔より、君たちに仕うまつりつるに、ほど大きに、蟹といふ物、ゆめばかりつき給はぬこそなけれ。二月浴むし奉りたるやうにこそおはすめれ」。中納言、「見給へ放たねば、さもあらむ」。「典侍候ひてましかば。いとかしこかりけり。親にはおはしますとも、立たせ給へや。女にこそおはしますめれ」と聞こゆれば、「何か、そは。」「そのわたりをもよく繕ひ給へ」と聞こえむ」とぞや」とのたまふ。

(蔵開・上 四七八〜四七九)

⑦さて、御湯殿果てぬれば、女御の君、抱かまほしう思せど、

父おとど添ひ居給へれば、尚侍のおとど抱き給ひて、御几帳  
ささせて入り給ひて、宮の御方に臥せ奉り給ひつ。中納言御  
帳の内へ入り給へば、尚侍のおとど、「あなさがな。あらは  
なるに」とのたまへば、「何か。かかる宮仕へ仕うまつる人  
には、内外をこそ許し給はめ」とて慎み聞こえ給はねば、女  
御の君、外にみざり出で給ひぬ。中納言、「久しく寝も寝侍  
らねば、乱り心地、いと悪しう侍る。罪許し給へ」とて、宮  
の御傍らにうち臥し給ひぬ。  
(蔵開・上 四七九)

⑧中納言は、例ものし給ふ東の廂に、儀式して、御手水・物の  
賄ひなどし据ゑたれど、母屋の隅より、頭もさし出で給はで、  
宮の御おろしをのみ参る。昼間の人なき折には、這入りつつ  
宮の御傍らにうち休み、これかれおはすれば、御帳の外の土  
居に押しかかりて、居眠りし給へり。夜は、弓弦走り打ちつ  
つ寝ず。  
(蔵開・上 四八一)

⑨藤中納言、「僻みたるやうなり。かはらけ取りてまうでむ」  
とて、紫苑色の織物の指貫、同じ薄色の直衣、唐綾の掻練襲  
着て出で給ふ。この頃、例よりも、かたち盛りなり。下襲の  
裾、いと長く走り引きて、かはらけ取りて出で給ふ。兵部卿  
の宮、「あなめづらしや。いみじくも木深くも籠られたりつ  
るかな」とて、目を研ぎて、皆まもり給ふ。さらに難なき、  
帝の御増なり。「源中納言、なずらひたり」と言ひしかど、

今は、いとこよなし。

(蔵開・上 四八六)

⑩右大将よろほひて入り給へば、中納言、しどろもどろに酔ひ  
て、西の御方に御送りして、「酒を食べて、食べ酔ひて」と、  
いと面白き声に歌ひて入りおはすれば、女御の君、いぬ宮搔  
き抱えて、御局へ入り給ひぬ。  
(蔵開・上 四九二)

⑪あるじのおとど、「いづ方か。中納言の居給ふ座なるや。誰  
をしるべにてか、正頼も侍らむ」。「中納言は、候ひにくけれ  
ば」。あるじのおとどの、「仰せ言にて請じ入れ給へ」と、父  
おとどに申し給へば、「はや、まかり入れ」とのたまふ。あ  
るじのおとど、「忠澄の朝臣も、今宵は、なほ、まかり入れ」  
とのたまへば、二所ながら入りて居給ひぬ。  
(蔵開・上 四九六)

⑫は、女一の宮の懐妊から出産直前までを描いた場面である。  
仲忠は、俊蔭伝来の蔵から出てきた「産経などいふ書ども」を  
取りだし、「女御子にてもこそあれ」と思い、「生まるる子、か  
たちよく、心よくなる」と書かれた物を、全て自らの手で調理  
して女一の宮に差し出している。後にいぬ宮が誕生することを  
踏まえた上で、この場面を見てみると、(蔵開き)により出て  
きた書物の中に「産経」があり、それに従ったがために、女一  
の宮は女兒を産んだかのような書かれた方がされているように  
読める。また、仲忠は、「かくて、その年は、立ち去りもし給

はず。かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ。」とずつと屋敷から出ていないことが書かれ、それは、次の「かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを」という朱雀帝と仁寿殿の女御の会話からも確認できる。

つまり、女一の宮が妊娠したと判明すると同時に、仲忠は俊蔭伝来の蔵から出てきた書物を読み、そこに書かれた通りに女一の宮の世話をし、一方で、自身も籠もって学問に打ち込んでいた。またここで重要なのは、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物を仲忠が読む行為を指して、「学問」といういい方がされていることである。蔵から出てきた書物は、その全てが「学問」の対象になるものではないものの、ここで仲忠が書物を読む行為は「学問」であるとされ、以降、仲忠は「学問」を収めた人物であり、なおかつ「書物」を所持する人物と位置づけられる。そして、女一の宮の出産が近づき、ついにいぬ宮が誕生する。それが、次に挙げた②の場面である。いぬ宮が「声高に」泣く声を聞いて、仲忠は、「御帳の帷子を掻き上げて、『何ぞや、何ぞや』と、御帳の中を覗いている。この仲忠の行為を、母俊蔭の娘が咎めてはいるものの、仲忠は「見る」ことをやめない。さらに、続きには、仲忠が「わが親」と述べていることから、仲忠の御帳の内側を「見る」という行為は継続していることがわかる。さらに、「中納言、『なほ、物、はた、籠れりける所かな』と見給ふに」とあることから、結局、いぬ宮の産声を聞いてから女一の宮の出産終了までの全てを、仲忠は見えていたということになる。

③は、俊蔭の娘がいぬ宮の臍の緒を切る際に、人を特定せず呼び掛ける声を挙げた場面である。俊蔭の娘の声を聞いた仲忠は、「つい居て」御帳の側に来る。そして、俊蔭の娘の要望に従い、「下なる物」を二つ、指貫と白き袴の袴一襲を脱ぎ、「御衣架のもとに立ち寄りて、入りて見」ている。この部分から、やはり仲忠は御帳の内に入っていることがわかる。

④では、「中納言、御帳のもとに寄りて、つい居て」という表現から、相変わらず仲忠が御帳のすぐ傍に居ることが分かる。そして、いぬ宮を抱き取るべく、「帷子を引き被きて、土居のもと」にまで来る様子が描かれている。これらの記述から、仲忠は、御帳の内には入っていないものの、御帳の境の部分までは入ってきていることがわかる。さらに、仲忠は、いぬ宮を抱き取り、見せてほしいと頼む兼雅にも見せようとはしない。また、仲忠は「かの龍角は、賜はりて、いぬの守りにし侍らむ」と、いぬ宮を琴の継承者として位置付けるかのような発言をしている。そして、三条殿にある琴を取りに行かせると、「稚児を懐に入れながら、琴を取り出で給ひて、『年ごろ、この手を、いかにし侍らむ』と思ひ給へ嘆きつるを、後は知らねど』などで、はうしやうといふ手を、はなやかに弾く」と、新生児を膝に抱えたまま、琴を弾き始める。

弾琴をする仲忠であったが、仲忠の琴は荒々しい天候を呼ぶため、俊蔭の娘が琴を弾く場面が続くにある。「この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齡栄ゆる心地す。かかれば、宮は、

御琴を聞こし召しつれば、ただにおはしつるよりも若やかに、

「わざをしつる」とも思されず、苦しきこともなくて起き居給へり」とあることから、〈蔵開き〉で嫗・翁が言っていたことを裏付けるような描写がここでなされていることに気付く。また、「琴は、弾き果て給へれば、袋に入れて、宮の御枕上に、御佩刀添へて、置きつ。」と、先にあった仲忠の言の通り、龍角風をいぬ宮の守りとするかのように、「御佩刀」と共に置く。そして、夜が明け、正頼やその子供たちなど、多くの人間がやってきたとき、仲忠は、「中納言の君は、かくし給へとも、」あなかしこ」とも聞こえて、なほ、稚児抱きて居給へり」と、未だにいぬ宮を抱えたまま、外に出て行っていないことが書かれている。

⑤は、乳付けの前にいぬ宮に薬を飲ませる場面だが、その際にも、仲忠はいぬ宮を自身の懐に抱いている。前の場面でもずっといぬ宮を抱き続ける仲忠が描かれたが、ここでも、いぬ宮を抱いたまま離さない仲忠が描かれている。

⑥は、典侍と俊蔭の娘によつて行われる御湯殿の儀の場面である。ここでも、仲忠はその場から出て行かずに様子を見守っている。さすがに見かねた典侍が、「親にはおはしますとも、立たせ給へや」と言うものの、仲忠は出て行く様子がない。

⑦は、いぬ宮を抱きたいと思う仁寿殿の女御が、仲忠がいるためにそれが叶わず、代わりに俊蔭の娘が抱き、女一の宮の側にいぬ宮を寝かせる場面である。それを見た仲忠は、「御帳の内へ入」ってしまい、いぬ宮が生まれた場面の時と同じ言葉で

俊蔭の娘に叱られているが、やはり出て行く様子はない。

⑧は、仲忠が東の廂にいないことが描かれる場面である。仲忠は本来、東の廂に在るべきのだが、そこには用意しておくべきものを置いておくだけで、仲忠自身は、「母屋の隅より、頭もさし出で給はで、」昼間、人がいない時には、御帳の内に「這入り」そこに誰かが来ると、「御帳の外の土居に押しつか」つている。つまり、仲忠は、外側にあたる東の廂にはおらず、内側にあたる母屋から外に顔も出さずに、御帳の内にいるか、人が来ても御帳の境の部分に在るのだ。

⑨は、いぬ宮の七日の産養に、多くの人々が集まってきて宴を開いている様子が描かれた後の場面である。「藤中納言、」僻みたるやうなり。かはらけ取りてまうでむ」とて、紫苑色の織物の指貫、同じ薄色の直衣、唐綾の搔練襲着て出で給ふ」という部分から、母屋の中にずっと籠っていた仲忠が、やつと出てきたことがわかる。この場面までに仲忠が「外に出た」という記述はない。女一の宮がいぬ宮を出産する直前に、仲忠がいぬ宮に仁寿殿の女御が女一の宮の様子を見に来た、という記述はあるものの、それだけである。このことから、仲忠は、少なくとも半年ほどの間、建物の中にといたことになる。それは、次の兵部卿の宮の発言でも証明される。「いみじくも木深くも籠られたりつるかな」は、仲忠がうつほ育ちだということと掛けているのだということは先行研究で述べられているが、注12今、ここで重要なのはそこではなく、母屋の内に籠ったままずっと出てこないことが「木深し」という言葉から推察できる



ということである。

⑩では、泥酔した仲忠がいぬ宮と女一の宮のいる御帳の内に  
入る場面が描かれる。七日の産養の饗宴に遅れた仲忠は、正頼  
から「闕巡」を強いられる。何杯も飲酒して泥酔した仲忠は、  
「いと面白き声に歌ひて」、女一の宮といぬ宮がいる御帳の内に  
入っていく。しかし、すかさず女御の君がいぬ宮を抱いて、御  
帳のすぐ傍にあったと思われる大宮の元に連れていってしまふ。

ここまで、「入る」「入る」にそのままそこに居る」という行為  
を繰り返してきた仲忠の、「入る」という行為に注目してきたが、  
少々異例な「入る」という行為が行われているのが⑩の場面で  
ある。仲忠の案内が必要な場面だというのに、正頼と兼雅が訪  
ねてきた東の廂に仲忠はいない。兼雅の呼びかけにより、母屋  
の中に居た仲忠は東の廂の間に出てくる。しかし、これは仲忠  
からしたら「出る」行為であるにも拘わらず、「入る」という  
表現が使用されている。忠澄とセツトにした「二所」という表  
現であるため、忠澄に合わせた表現になっているという見方も  
可能だが、ここはそうではなく、産養が終了した今、仲忠が「入  
る」行為をしなくなったためではないだろうか。

### 三. 籠る仲忠

仲忠は、二十代後半のある年の十一月に、京極邸の〈蔵開き〉  
を行なった。そこで真つ先にクローズアップされてくるのが、  
「薬師書・陰陽師書・人相する書・孕み生子む人のこと言ひたる、  
いとかしこくて」といったものである。そして、その翌年の一

月に妻女一の宮が懐妊し、生まれてくる子が女の子であればよ  
い、容姿も心も良い子になればよいと、仲忠は、蔵にあった書  
物、特に「産経」を活用する。これは、逆に考えると、「いぬ宮」  
という絶世の美少女が生まれてくるためには、仲忠が蔵を開け、  
何が蔵に入っているのかを把握し、そこにあった書物を読み、  
なおかつそこに書かれたことを実践しなければならぬという  
ことになりはしないだろうか。

仲忠は、女一の宮の世話をする一方、「書どもを見つつ、夜昼、  
学問を」していた。このようにして、仲忠が屋内に籠っていた  
期間は、どんなに少なく見積もっても、一月から八月までの半  
年以上はある。つまり、この期間で、仲忠は、清原一族の学問  
を継承していたということになるのだ。確かに仲忠は、女の子  
が生まれるように、その子の容姿・心が良くなるようにと努力  
はしたが、それが結果に結びつくかどうかは定かではない。た  
だ、仲忠は、よく言われているように、〈琴〉の系譜を担う者  
であり、清原家の学問を担う者であり、さらには、これより後  
の話になるが、拙論で指摘したように〈手本〉の系譜を担う者  
でもある。このように考えると、仲忠の子は、何かしらの系譜  
を担う者である可能性が非常に高くなる。

しかし、女一の宮がいぬ宮を身籠った時点で仲忠が次世代に  
継承できるのは〈琴〉のみであった。生まれてくるのが女の子  
と決まっていれば、〈琴〉だけで良いのだが、男の子であった  
場合には、その直前に開いた俊蔭伝承の蔵から出てきた書物に  
象徴される〈学問〉を継承させた方がよい。そのために、仲忠

は、女一の宮が出産するまでの間、籠もって、清原一族の学問を継承していただのではないだろうか。

ここで、〈蔵開き〉の場面を思い起こしてみると、嬭と翁が昔語りをする場面では、「俊蔭」の巻が回想されている。また、兵部卿の宮は「いみじくも木深くも籠られたりつるかな」と、仲忠が俊蔭の娘から秘琴を伝授された時に籠っていたうつつほを想起させるかのような発言をしている。さらに、この次の節で見るが、仲忠と朱雀帝の会話でも、仲忠が学問をしている間、出仕しなかつた理由を答えるときに、仲忠自身が「籠る」という表現をしている。また、〈蔵開き〉の時には、「清原家」が全面に出てくる。このように注意してみると、仲忠が学問をして籠っていた半年ほどの時間は、仲忠自身が清原家の学問を継承し、なおかつもうすぐ生まれてくる子に継承させるものを、〈琴〉以外にもう一つ獲得する時間であり、そのための籠りの空間であつたと考えられる。

一方、女一の宮がいぬ宮を出産してから七日の産養まで、仲忠は、屋内どころか母屋の中からも出ず、さらには御帳台の傍にいる様子が何度も描かれる。そして、この七日の間に、仲忠は龍角風をいぬ宮の守りとし、生まれたばかりのいぬ宮を膝に抱えて琴を弾く。これは、いぬ宮こそが、俊蔭を始祖とする〈琴〉の継承者であるということを示す行為以外のなにもない。

「いぬ宮」が女の子であるから、〈琴〉を継承させる。そのために、仲忠は母屋に籠るだけでは飽き足らず、何度もいぬ宮の

いるところに入り、「いぬ宮」という自分の子どもを確認しているのだ。これはつまり、「いぬ宮」という自身の子どもに、〈琴〉の継承者になることを決定づけるための行為だとも言える。そして、〈琴〉の継承者として育てようと決めたがために、仲忠は、膝にいぬ宮を抱いたまま琴を弾き、その琴に御佩刀を添えて守りにしているのだ。

今一度振り返ると、俊蔭伝来の蔵に入って行けるのは、〈蔵開き〉をした仲忠ただ一人である。そして、その蔵から持ち出した書物を持って仲忠は籠りの空間に入り、半年ほどの間に清原家の〈学問〉を継承する。このようにして、仲忠は学問を継承する者となつた。また仲忠は、母屋という空間の中で、御帳台や御湯殿といつた、さらに区切られた空間に入つていき、ついにはそこからいぬ宮を抱き上げてしまう。そして、いぬ宮を抱えたまま琴を弾き、その琴と御佩刀を添えていぬ宮の守りとするので、いぬ宮を琴を継承する者としたのだ。

以上のように、仲忠の行動を見ていくと、「うつつほ物語」とは、継承されていくもの——ここでは〈琴〉と〈学問〉を指す——を継承する者が、いかにして継承者となるか、というところを描いているといえる。これは、「俊蔭」巻において、木のうつつほの中で仲忠が琴を継承したのと同じような状態だと言えるのではないだろうか。

#### 四 朱雀帝への進講

ここでは、〈蔵開き〉で出てきた書物を、仲忠が朱雀帝に進

講する場面を見て行く。

①「「なか、いと久しく。先つ頃、節会などありしに、「参られやする」と思ひしに、さもあらざりしかば、いとさうざうしくなむありし。人よりはむつまじかるべき心地するを、疎き上達部などよりは。されば、ものせられむこそよからめ。」大将、かしこまりて、「日々に参り来べく侍るを、月ごろ、仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、捨てたるやうにて侍りけるを、さすが、人の、え取り失はで侍りけるを、いと見つけがたくて取り出でて侍り、『累代の書の抄物といふ物見給ふ』とてなむ、文書といふ物見給へつきぬれば、世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」。上、「よきことにこそはあなれ。学問など、心に入れてものせらるるは、朝廷のためにも、いと頼もしきことなり。……さる文書・書などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこきこと。よろづの書どもなど、具して、皆ありや」。大将、「皆具して、なき書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りけるそれが、皆書き読み侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読み侍りける、全く細かにして侍るめり。それをぞさるものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」。上、「いかなる物ぞ」。大将は、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書き侍りける

と、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、「なか、今までものせられざりつる。有職どもの、いみじき悲しびをなして置きたる物、げに、いかならむ。なほ、朝臣は、ありがたき物領ぜむとなれる人にこそ。かれ、とく見るべき物ななり」。大将「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの書の序に言ひて侍るやうにも、『唐の間の記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間、霊添ひて守る』と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ』となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せ侍りつる」……上、「朝臣の読み侍るには、その霊ども、よも祟りはなざじ。今日は、府の者ども勞ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」とのたまふ。

(藏開・上 五二七〜五二八)

②かくて、一、二日ありて、大将殿、内裏の仰せられし書ども持たせて参り給ひて、そのよし奏せさせ給ふ。……俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。今一つには、俊蔭のぬしの父式部大輔の集、草に書けり。「手づから点し、読みて聞かせよ」とのたまへば、古文、文机の上にて読む。例の花

の宴などの講師の声よりは、少しみそかに読ませ給ふ。七、八枚の書なり。果てに、一度は訓、一度は音に読ませ給ひて、「面白し」と聞こし召すをば誦せさせ給ふ。何ごとし給ふにも、声いと面白き人の誦じたれば、いと面白く悲しければ、聞こし召す帝も、御しほたれ給ふ。大将も、涙を流しつつ仕うまつり給ふ。

(蔵開・中 五三五)

③大将、「いとほし」と思ひて、かい直して、いと面白く読みます。その声、いと面白し。しろくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし。

(蔵開・中 五四二)

④「かかることあり」とて、御簾のもとに後の宮おはせば、上は、大将に御目くはせて、みそかに読ませ給ふ。後の宮、「内裏こそ、聞かせ給はざらめ。講師は、心せよ」とのたまへば、え読までとりくひもて候ふ。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられそ。ただ、言ふに従ひて読め。これは、誰も

誰も読みつべけれど、そゑに異人の読むまじき由のあれば、まづ読まするぞ」とのたまへば、少し高く読む。所々は、声にも読む。後の宮、いみじう憎み給ふ。されど、いとよく聞こし召す。異人は、え聞き知らず。

(蔵開・中 五四八)

①は、仲忠が朱雀帝に書物の進講をするに至る経緯が示される場面である。朱雀帝が仲忠に「などか、いと久しく。先つ頃、

節会などありしに、「参られやす」と思ひしに、さもあらざりしかば」と、節会にも来なかつた理由を聞いている。それに對し、仲忠は、「仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書ども」を得て、「籠り侍りぬる」と答えている。これは、前節で述べた、仲忠が屋敷から出ずに書物を読み続ける様子を「籠る」とすることの根拠でもある。続く朱雀帝の、書物は皆あるか、どういったものがあるのかという問いに對し、仲忠は、「皆具して、なき書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りける、それが、皆書き読み侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読み侍りける、全く細かにして侍るめり。それをぞさるものにて、いとみじき物をなむ見給へつけたる」、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて侍りけると俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」と奏上する。それに対し、朱雀帝は、「なほ、朝臣は、ありがたき物領ぜむとなれる人にこそ。かれ、とく見るべき物ななり」と、清原一族の書物を褒める。

また、仲忠は、宮中に赴くことができなかつた理由として、「かの書の序に言ひて侍るやうにも、『唐の間の記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間、靈添ひて守る』と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のこと、わづかなる女子知るべきにあらず。二、

三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、靈寄りて守らむ」となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せて侍りつる」と述べ、それに対して朱雀帝は、「朝臣の読みて聞かせむには、その靈ども、よも祟りはなさじ。今日は、府の者どもも勞ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」と、書物を進講するようにと命令している。

②は、実際に進講を始めた場面である。俊蔭の集を読むようにと朱雀帝に言われた仲忠は、「古文、文机の上にて読む。例の花の宴などの講師の声よりは、少しみそかに読んだ。「みそかに」とは、殿上に集まっている人々には聞かせないようするためである。つまり、ここは、朱雀帝と仲忠の二人だけがいる空間で、仲忠は俊蔭の集を見て読み、それを朱雀帝が聞いているという状況である。この直後、夜の御膳の時に、後の宮の五の宮が加わる。そして、翌朝、朱雀帝は五の宮を使いにして春宮を進講の場に呼び寄せるが、春宮は正午になってから参上し、遅れて仲忠が参上して、二日目からは、進講はこの四人で行われる。

一日中進講を行ない、そして夜も進講を行なつて、朱雀帝、春宮、五の宮は楽器を弾き、仲忠は書を読む。進講二日目の夜を描いたのが③である。仲忠は、春宮のところに来た藤壺の手紙を見て動揺し、「僻読み」を多くするが、それを朱雀帝に指摘され、気を取り直して読みなおしたところ、それは、「声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、

雲居を穿ちて、面白きこと限りなし」であった。

④は、進講三日目の夜から四日目の暁までを描いた場面である。後の宮が進講を聞きにきたために、朱雀帝は仲忠に合図して、よりいっそう、小さな声で読ませている。後の宮から、「講師は、心せよ」との言葉がかかるが、朱雀帝は「これは、誰も読みつべけれど、そゑに異人の読むまじき由のあれば、まづ読まするぞ」と言つたため、仲忠は、「少し高く読む。所々は、声にも読む。これを後の宮は、憎たらしく思ひはするもの、理解はできるとあり、それ以外の人は理解ができない、とある。このように見てくると、朱雀帝の要請によつて行なわれることとなつた俊蔭の書物の進講は、朱雀帝、春宮、春宮の同母兄弟五の宮と、全て、皇統に関わる人物が聴衆として集められ、それ以外の人物の介入が許されていないことがわかる。唯一、後の宮だけが、仲忠が「声にも読んだ際に内容を理解しているが、この後の宮こそが、春宮と五の宮の母であるので、やはり、皇統に密に関わる人物として考えて良い。

##### 五、〈学問の系譜〉

前節において、仲忠による朱雀帝をはじめとした皇統関係者たちへの進講を見てきた。この仲忠の進講については、伊藤禎子が、声によつて行われている学問であると指摘している。<sup>注14</sup>確かに、学問が声によつて行われているということは大きいが、ここでは、別のことに着目したい。前節の③で、仲忠の声が大きくなくなったという記述があるが、その声が涼に聞えたという場

面がこの後にある。

殿上には、源中納言・右大弁・中將、異人もいと多かり。

……源中納言、大將の君に申し給ふやう、「なごか、君は、昔より、いかばかりかは契り聞こゆる、『この御文を承らむ』とて、妻の懷を捨てて、かく寒きに、震ふ震ふうちはへ候ふ効なく、一文字をだに聞かせ給はぬ。少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」。大將、「仰せ言あれば、高くは、え。そがうちに、苦しう侍れば、声も出でず」。中納言、「さて、いかで、昨夜は、ひととは、雲を穿ちて、空には上りし。このぬしこそは、『わが世の末の博士』とは思ひつれ。……」。

（蔵開・中 五四四～五五五）

一部の許された人間しかいない空間で、仲忠による俊蔭の書物の進講は行われていたが、ただ一度のみ、その場からは排除されていた涼にも仲忠の声は聞こえていた。俊蔭の書物の進講は、琴と同様、公開と非公開の狭間にあつて、人々の関心を惹き寄せている。そのように考えると、この、進講の場とは、規模こそ違うものの、楼の上における秘琴披露の場と同様、学問披露の場であると言える。

このように、「清原氏」を始祖とした〈系譜〉と、その〈系譜〉が継承してきた物を求める皇統を担う者たちがあり、彼らが「清原氏」の〈系譜〉を求めることによって周囲の人物たちも〈系譜〉の存在を知り、〈系譜〉を担う者たちが持つ物や技法を

求めてゆくという構造は、〈琴〉だけではなく、〈学問〉でも同じことであると言える。論者は、これを〈学問の系譜〉と考へたい。そして、蔵を作り、そこに書物を納めて鎖をさしたののは俊蔭だが、〈学問の系譜〉の始祖は、俊蔭の両親であるということに注意しておきたい。物語の「主人公」として位置付けられる藤原仲忠は、藤原氏でありながらも、〈琴〉と〈学問〉という、清原家を象徴する二つの系譜を担っているのである。

\*『うつほ物語』本文は、室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう、一九九五）により、適宜傍線を付した。なお、巻名とページ数については括弧内に記した。

#### 注

1 『うつほ物語 全 改訂版』の注には、「式部大輔」は、式部省の次官で、儒者で、御侍読をした者の中から選ばれた。「左弁官局の長官。『職原抄』には、「文才なき人これに居らず」とある。」とある。

2 三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」（『東横国文学』一五、一九八三・三）

3 大井田晴彦「仲忠と藤壺の明暗——「蔵開」の主題と方法」（『俊蔭一族復興——「蔵開」における〈書物〉の力の主題と方法』『書物と語り（新物語研究）』五、一九九八・三、「うつほ物語卷々論（梗概付）第二部』『国文学』

- 一九九八・二〇〇二)『うつほ物語の世界』、二〇〇二)。この他に、蔵開きに関係する大井田晴彦の論文として、「蔵開巻梗概」(『国文学』一九九八・二〇)、 「国譲」の主題と方法——仲忠を軸として——(『うつほ物語の世界』、二〇〇二)、『うつほ物語』 国譲巻の主題と方法——仲忠を軸として——(『国語と国文学』一九九八・三)などが挙げられる。
- 4 伊井春樹「俊蔭の家集と日記類——『うつほ物語』蔵開巻の意義」(『中古文学の形成と展開——王朝文学前後』一九九五・四)
- 5 猪川優子「『うつほ物語』宮の君と小君——次世代の確執——」(『古代中世国文学』一八、二〇〇二・一二)
- 6 本論において〈蔵開き〉とは、俊蔭伝来の蔵を開くことを指す。
- 7 前掲の三田村論に同じ。
- 8 前掲の大井田論に同じ。
- 9 伊藤禎子「『うつほ物語』〈蔵開き〉と音楽物語」(『日本文学』二〇〇七・一二、後に「書物の〈音〉」、『うつほ物語』と転倒させる快楽」森話社、二〇一一)
- 10 『うつほ物語』本文は室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう・一九九五)により、適宜傍線を付した。なお、巻名とページ数については括弧内に記した。
- 11 中嶋尚は「うつほ物語論(6) 琴の族序説」(『東洋大学大学院紀要』三九、二〇〇二年)において、「あたかも
- 京極旧庫を開いて貴重品の発見を見たことと、仲忠家における一女子を儲けた慶事とが、どこかで連なっているようにさえ受取れる」と述べている。
- 12 『新編日本古典文学全集 うつほ物語②』(中野幸一校注、小学館、二〇〇一)は、「木深くも籠られたりつるかな」について、「奥深い、の意から転じて、ひっそりと目立たないさま。仲忠が北山のうつほに幼児期を過した過去を念頭に置いたものか」と注する。
- 13 口頭発表「王朝物語における「手本」——仲忠の「手本四巻」を中心に——」(日本文学協会第三二回研究発表大会、於長野県短期大学、至二〇一二年七月一日)
- 14 前掲の伊藤論文に同じ。(むとう・ながこ 博士後期課程)